

第16回日本語大賞

特定非営利活動法人日本語検定委員会



中学生の部 優秀賞 受賞作品

『ここだけの時間が流れる宝の島』

東京都

千代田区立九段中等教育学校

三年 川嶋 汐里

ここだけの時間が流れる宝の島

千代田区立九段中等教育学校 三年
川嶋 汐里（かわしま しおり）

私は昔、鹿児島県の南のほうにある人口約百二十人の小さな島「宝島」に留学していました。そこで暮らした一年間はとても長かったのに一瞬でした。数年ぶりに島に来て昨日まで居たかのような感覚で、それでも最近行っただけなのにもう寂しいような感覚になります。そこにしか無い不思議な時間が流れているのです。

宝島は、奄美大島の北にある七つの有人島と五つの無人島からなる村です。沖縄と本土の間に位置していて、琉球と大和の文化が混ざり合い独自の文化が発展しています。私はここで初めての文化や慣習にたくさん触れ、長くて一瞬だった島での生活を送りました。

私がよく覚えているのは、水泳の授業場所が学校でないということです。水泳の授業がある日は、給食を食べ終わったらそれぞれ家に帰ります。そのあと時間になったら集落の真ん中のコミュニティセンターに集まります。みんな集まったら島に一つの海水浴場に向かって歩きます。歩いているときは、みんなで歌を歌ったりしりとりをしたりしていました。集落から坂を下って港と牧場を通り過ぎたところにある海水浴場はとてもきれいです。砂浜の左右に岩があり、この海水浴場をまるでプールかのような形にしています。横幅は五十メートルほどだったかもしれませんがそのときの私にとってはとても広いプールでした。海に潜って目を開けると、透明な水を通して海の生物たちが見えます。生きている貝やサンゴ礁、魚と一緒に泳ぐことができるのです。波があつて、友達とはしゃいで、疲れる時間だったかもしれないけれど二時間の授業はいつも一瞬で終わってしまいます。

いつも水泳の授業は午後なので、海水浴場からコミュニティセンターまで歩いたらその集落内で解散します。私たちはいつもそのままコミュニティセンターまへの水道の冷たいシャワーで砂を流し、コミュニティセンターの隣の、島にひとつの公園で過ごしました。公園の遊具は滑り台とブランコだけです。ほかには椅子とテーブル、船や犬の形をした登って遊べるものが置いてあります。ブランコで体についた冷たい水をとばして体を乾かして、鬼ごっこで集落内を走り回るともう六時半のチャイムが鳴ります。家に帰って宿題をしてご飯を食べ、同じ里親のもとに住む人とおしゃべりをしていたらもう寝る時間になります。日が沈むのが遅い島でも、短い一日です。

ほかにもびっくりするようなことがたくさんありました。宝島にはハロウィンがありません。ですがそれに似た別のイベントがあります。それが「みかんたもーれ」です。十五夜の夕方から始まる、島の一大イベントです。子供たちはいくつかのグループに分かれて、集落内の家を周り「みかんたもーれ！」と、お菓子をもらいに行きます。家を回り終わったらコミュニティセンターに戻り、みんなでどれくらいお菓子をもらったか見せ合いました。ですがみかんたもーれの本番はここからです。日が沈むと、島の人たちは公園に集まります。その日の公園は少し特別で、いつもは桑の実だらけの砂場がきれいになっているのです。そこで小中学校の生徒たちが相撲を取るからです。その年の十五夜は運動会が近かったので、紅組と白組で対戦しました。相撲が終わったら、最後は大綱引きです。集落を西と東に分けて、西に住む人と東に住む人で綱を引きあいます。それが終わるともう空は真っ暗で、きれいな星がみえました。

なんのイベントがない日でも、東京から来た私にとって宝島での日々は特別で一瞬でし

た。学校が終わったらみんなで集まって、集落で鬼ごっこをしたりコミュニティセンターで宿題をしたり公園でボール遊びをしたりしました。五時になると売店が開くのでそこでお菓子を買うこともありました。島に一つの売店が開くのは朝と夕方の数時間のみなので、その時間は売店に行くという人な人に会えました。そのあとはすぐチャイムが鳴ってしまうので、みんな家に帰ります。一日はとても長いのに、とても短い。どんな日もそうでした。

今の私は東京に帰ってそこで暮らしていますが、島での記憶は懐かしいのに鮮明です。夏なのにはとてもせずに遊んで、冬だけど島の暖かさを感じる。そんな不思議な日々は、いまでも島に行けば「汐里ちゃん、おかえりー」という島の人の港のお迎えとともに味わえます。まるでタイムスリップをしたかのように。宝島には宝島にしかない時間が流れています。その「宝島だけの時間」が島の宝であり、宝島を表す言葉です。